

動詞から副詞への文法化*

高橋 光子

1. 序論

比喩は言語の中に遍在しており、言葉の意味拡張や意味変化に深く関わっている。例えば辞典で「足」という言葉を引いてみると、①動物の体で、体を支え、歩く働きをする部分、②物の下について支える用をするもの、③物の下・末の部分、④訪れること、⑤人が移動するために使う交通機関・乗り物、などさまざまな意味がある。そしてこの中では、①が最も基本的で中心的な意味であり、②～⑤は①から比喩によって派生した意味であることが分かると思う。つまり、②は「テーブルの足」のように①の意味と形状的・機能的な類似性がある。③は「足を切る」のように物の下部分を指すため、①の意味と位置的類似がある。④は「足を伸ばす」「足を運ぶ」「足が遠のく」のように、足を使って歩いた結果、ある場所を訪れる事になり、換喩的に意味が拡張したものである。そして⑤は「通勤の足」と言うように移動手段としての乗り物のことを指すが、①の意味の「足」も、人間が移動するためのいわば手段であるため、二つの間に類似性が存在する。

このように、①の意味を中心としてそこから②～⑤の意味が比喩的拡張によって出ている時、①の意味を「起点」、②～⑤のそれぞれを「目標点」と呼ぶことにする。また、①は具体的で物理的な領域の意味となるが、この意味領域を「起点領域」と呼び、②～⑤のそれぞれを「目標領域」と呼ぶ。

比喩の本質的な機能は、全く異なる二つの意味領域のものの中に、類似性や近接性を見出すことである。基本的に、類似性を見出す場合は「隠喩」、近接性を見出す場合は「換喩」である。佐藤（1978：144）によれば、言語学者のロマン・ヤコブソンは、言語表現の仕組み全体を、この隠喩と換喩という、たった二つの基本的メカニズムに還元してしまったと言う。例えば上に挙げたように、どのような辞典でも、一つの語の意味には、中心的な意味とそこから派生していった意味があること、また、それら複数の意味

の間には、類似性や近接性の関係があることを容易に見出すことができるのではないだろうか。そのため、言語は本質的に比喩的なものであるという「根元的比喩」という考え方（佐藤1978：104）が出てくると考えられる。

言葉の数には限りがあるが、その有限の言葉で、無限に変化する外界の状況や世界を表現しようとする時、その手段として比喩が存在していると言える。比喩は、すでに持っている言葉で新しい物事や抽象的な事柄を概念化するための工夫であり、言葉の意味の拡張や抽象化に不可欠な人間の言語能力であると考えられる。

言葉の意味の抽象化の中で、具体的な意味を持つ内容語（名詞や動詞など）から、より、抽象的な意味を持つ機能語（形式名詞や副詞など）へと変化するのには、特に「文法化」と呼ばれている（Heine, Claudi, & Hünemeyer 1991など）。そして、この文法化を引き起こす認知的原動力となっているのが比喩である。

本稿では、動詞から副詞への文法化の中で比喩がどのように関わっているのか、具体的な用例を基に考察する。収集する用例は、「強いる」「追う」「重ねる」（動詞）と「強いて」「追って」「重ねて」（副詞）である。

用例収集や用いる辞典についての説明など（2節）の後、「強いる」から「強いて」へ（3節）、「追う」から「追って」へ（4節）、「重ねる」から「重ねて」へ（5節）の順番で分析を進めていく。そして6節では、具体的な意味を持つ動詞から抽象的な意味を持つ副詞が出て来る時の比喩の重要性や、品詞という枠を飛び越えて働く比喩の創造的な側面について、認知言語学的観点から考察する。

2. 用例収集や分析・考察の手順など

動詞の「強いる」「追う」「重ねる」と、副詞の「強いて」「追って」「重ねて」の用例を収集するため、『CD-ROM版 新潮文庫 明治の文豪』（1997）を使った。ここに収められている明治の文学作品のテキストファイルに対し、コンピュータ検索をすることによって、それぞれの用例を収集した。また、動詞や副詞の意味を調べるため、『日本国語大辞典 第二版』（2001）（以後『日国』）を用いた。この辞典は、ほぼ時代を追って語義説明をし、語釈を分けた場合は、その意味・用法について、最も古いと思われる用例を採用し、かつ、用例の並べ方は、時代の古いものから新しいものへと順次並べているため、動詞や副詞のさまざまな意味が現れた歴史的な順序を確認するのに役立つと思われる。

ところで、文法化の起点領域となる動詞の意味は、具体的で中心的な意味である。この意味は、瀬戸（他編）（2007：4）の中で「中心義」と呼ばれている。「中心義」は、具体性や身体性が高く、すぐに理解でき、想起されやすいなどの特徴を持ち、意義展開

の起点となることが多いと言われている。

一方、目標領域となる副詞の意味は、起点領域である動詞の意味との関連において理解すべきである。そしてこれは、後に見るように、副詞の意味の中で第一番目に挙げられた意味が該当する場合が多いようである。

3節以降の分析では、辞典の中の動詞と副詞の意味記述から、起点領域と目標領域を設定したあと、その意味領域に該当する用例について吟味する。そして文法化の起点領域と目標領域の間にある関係について考え、そこに、どのような認知能力が働いているかを見ていくことにする。

3. 「強いる」から「強いて」へ

まず、動詞「強いる」と副詞「強いて」の意味は、『日国』によれば、次のようである。ちなみに、それぞれの意味の用例が見られる年代を【 】の中に付記することにする。

強いる：他人の意思を無視して、無理におしつける。無理に行なう。
無理に勧める。強制する。【8世紀後～】

強いて：① むりに。むりやりに。おして。あえて。【10世紀前～】
② むしように。むやみに。【1001-1014年頃～1205年】

副詞の二つの意味のうち、①の意味は10世紀前からあるのに対し、②は1001-1014年頃と遅れて出ていることが分かる。そして、①の方が中心的意味であり、②の意味は①から変化したものであると推定できる。

これらの動詞と副詞の意味を、歴史的に出てきた順に並べると、まず、動詞「強いる」(8世紀後)の意味があり、次に副詞「強いて」の①の意味(10世紀前)、そして「強いて」の②の意味(1001-1014頃)となる。動詞の意味は一つだけであるため、文法化の起点領域となる動詞の意味は、「他人の意思を無視して、無理におしつける」など、具体的な行為を表すものとする。そして目標領域の副詞の意味については、起点領域の動詞の意味との関連から、「むりに、おして」などの様子を表す①の意味と考えられる。

では、『明治の文豪』から抽出した動詞「強いる」が含まれた用例の中で、起点領域の意味を持つものを以下に挙げていく。

- (1) 敬太郎は自分の前に残された皿の上の肉刀と、その傍に転がった赤い仁参の一切を眺めていた。女は猶男を強いる事を已めない様子であった。男はその度に何とか蚊とか云って逃れていた。(彼岸過迄)

- (2) 三沢はその時既に暑さのために胃に変調を感じていた。彼を強いた五六人の友達は、久し振だからという口実のもとに、彼を酔わせる事を御馳走のように振舞った。
(行人)
- (3) 三沢は自暴に酔った揚句、乱暴な言葉まで使って女に酒を強いた。(行人)
- (4) 飲むものや食うものを強いて廻る父の態度も、にがにがしく私の眼に映った。
(こころ)
- (5) 東京で好い地位を求めろと云って、私を強いたがる父の頭には矛盾があった。
(こころ)
- (6) 幾何でも融通が付けば付いただけ助かるといった風の苦しい境遇に置かれた細君の父は、それより以上健三を強いなかった。(道草)

(1)~(6)の用例から、「強いる」という行為をする人の様子を連想してみると、「強いる」側では、一生懸命に、なんとか、相手の気持ちや意志に反することをさせようとしていることが分かる。例えば、(1)~(4)のように、食べたくない人や飲みたくない人に飲食させるためには懸命な努力をしなければならない。また(5)(6)のように、気の進まない人に何かをさせようとする時も、強いる側は「なんとかして」「一生懸命に」相手の気持ちを翻そうとするであろうと想像できる。

- (7) 友達がかねてから国元にいる親達に勧まない結婚を強いられていた。(こころ)
- (8) 幸に自分で其所を認めなければならない程に、世間からも己れからも反省を強いられていない境遇にある彼女は、気楽であった。(明暗)
- (9) そう思うと自分とは大変懸け隔ったようできて、その実何処か似通った所のあるこの腹違の姉の前に、彼は反省を強いられた。(道草)
- (10) ただ早晩平岡から表向きに、連帯責任を強いられて、それを断わり切れない位なら、一層此方から進んで、直接に三千代を喜ばしてやる方が遥かに愉快だと
(それから)

(7)~(10)の用例では、ある事を強要される側の「いやいやながら」「無理やりに」といった、気のすまない様子がある。逆に、結婚(7)を強いたり、反省(8)(9)や連帯責任(10)を強いたりする側の人の気持ちを連想すると、「熱心に」相手の気持ちに働きかけている様子があることが分かる。

このように、「強いる」という行為の中には、他者の気持ちに反して一生懸命にあることをさせようとする様子がある。そこには、強いる人の「懸命に」「熱心に」「なんとかして」相手の気持ちを変えてその気にさせようと努力する様子があることを想像するこ

とができる。一方、強要される側の人には、「無理に」「いやな」というマイナスの気持ちがある。

次に、副詞「強いて」が含まれた用例の中で、目標領域の意味を持つものを以下に見ていく。

- (11) 女共は路を除けて、笑いたいのを強いて押えたというような顔をして、男を見ている。(田舎教師)
- (12) 何分にも鼻の奥が詰って不自由である。しかも強いて言葉を出そうとすると、口へ出ないで鼻へ抜けそうになる。(坑夫)
- (13) 強いて寝ようとする決心と努力は、その決心と努力が疲れ果てて何処かへ行ってしまった時に始めて酬いられた。彼はとうとう我知らず夢の中に落ち込んだ(明暗)
- (14) 杉原の方では、妙な引掛りから、宗助の此所に燻ぶっている事を聞き出して、強いて面会を希望するので、宗助も已を得ず我を折った。(門)
- (15) 二の足を踏む父や兄を強いて納得させて、無二無三に養子に来て了った(其面影)

上の用例では、笑いたいのを「懸命に」押さえている様子(11)、鼻の奥が詰まっているのに「なんとか」言葉を出そうとする様子(12)、眠れないのに「なんとか」寝ようと「努力して」いる様子(13)、「熱心に」面会を希望する様子(14)、そして「無理に」納得させる様子(15)などが表れている。

- (16) 強いて説明せよと云わるるならば、余が心は只春と共に動いていると云いたい。(草枕)
- (17) 少し書きにくいだが、真実の為に強いて書く。(キタ・セクスアリス)
- (18) けれどどうしても筆を執って文を綴るような沈着いた心の状態にはなれなかった。強いて試みても、考が纏らない。(蒲団)

(16)において、心の状態というのは抽象的で捉えにくく、説明するのが難しいものであるが、その難しさを乗り越え、「なんとか」「懸命に」言葉を探して、心の状態を表現し説明している。(17)においては、少し書きにくいという心理的な障害がある場合でも、「なんとか」それを克服して「一生懸命に」書くのだということが分かる。(18)は、落ち着いた心の状態にない時はなかなか文を綴ることができないものだが、それを克服して「懸命に」考えをまとめて書こうとする様子が想像できる。

- (19) 老人は病を力めて、わがために強いて元気を付けている。(虞美人草)

- (20) 強いて頭を空虚に、眼を閉じてもなかなか眠れない、(浜菊)
- (21) 酒の力を藉りて強いて纔にその不愉快を忘れていた。(平凡)
- (22) その時はまたその時で、思わぬ運が思わぬ処から向いて来ないとも限らないと、強いて心を安んじていた。(田舎教師)
- (23) 強いて心配を押さえ付けて、今に直るだろう、今に直るだろうと、自分で自分に暗示を与えるように努めていた。(かのやうに)
- (24) 何とやら躊躇れるのを、強いて自分と気を励まして、窈と中へ入り、音のせぬように後を閉めて、姉の背後へ来て小さく坐り、先ず姉様と呼んでみる(其面影)
- (25) 小娘の、小さい心の臓をそっと開けて見て、ここにも早く失意の人の、苦痛の萌芽が籠もっているのを見て、強いて自分の抑鬱不平の心を慰めようとしている(青年)

「強いて」は、元気を付けたり(19)、頭を空虚にしたり(20)、不愉快を忘れたり(21)すること、また、心を安んじ(22)、心配を押さえ付け(23)、気を励まし(24)、心を慰める(25)といった心理的な意味領域にかかっている。同時に「強いて」の意味は、より抽象的な領域で「なんとか」「一生懸命に」努力する様子を表すものとなる。これは、笑いたいのを押さえたり(11)、鼻の奥が詰まっているのに言葉を出そうとしたりする(12)というような、具体的で物理的な領域で「なんとか」「懸命に」努力するのに比べ、一層、抽象的な様子を表すものとなっている。

- (26) それで君に頼んで見たのだ。然し君の方の都合が悪ければ強いてそうして貰わないでもどうかなるだろう。(行人)
- (27) 強いて厭な勘次へ挨拶をして一時なりとも肩身を狭くせねばならないのを厭うて遂億劫に成るのであった。(土)
- (28) 私には連れて来なければ済まない事情が充分あるのに、止せという奥さんの方には、筋の立った理窟はまるでなかったのです。だから私は私の善いと思うところを強いて断行してしまいました。(こころ)

上の用例は、「無理に」そうして貰わない(26)、「いやな気持ちを抑えて、無理に」挨拶をする(27)、「あえて」断行する(28)、というように、その行為をする人の気持ちのマイナス面や、その行為がしにくい状況を乗り越えて、そうしようとする様子が表れている。

以上、(11)~(28)の用例における「強いて」の意味を、具体性や抽象性、及び、その意味領域によって分類すると、次のようになる。(〔 〕の中は、該当する用例を示す。)

- ① 具体的行為の領域で、「懸命に」「なんとか」「努力して」その行為をしようとする様子を表す。[(11)~(13)]
- ② 言語的領域で、「なんとか」「一生懸命に」その言語的行為を押し通そうとしたり、成し遂げようとしたりする様子を表す。[(14)~(18)]
- ③ 心理的な領域において、「なんとか」「一生懸命に」努力するという、より抽象的な様子を表す。[(19)~(25)]
- ④ 行為をする人の気持ちのマイナス面に心的アクセスをすると、「無理に」「あえて」のような意味も表す。[(26)~(28)]

それでは、動詞「強いる」と副詞「強いて」の間にはどのような比喩的關係があるだろうか。最初に、動詞の「強いる」について、強いる側の人には「なんとかして」「一生懸命に」「熱心に」行為を強要する様子が伴っていた。同時に、その行為を強要される人には「無理やりに」「いやいやながら」という気の進まない様子があった。「強いる」という行為には二人の関与者がいるので、そのどちらの気持ちに心的アクセスするかによって相異なる二通りの様子が連想できたのである。

次に、副詞の「強いて」については、「懸命に」「なんとか」「努力して」「熱心に」ある行為をしようとする様子があった。また、「嫌な気持ちを抑えて」「無理に」「あえて」といった、気持ちのマイナス面も表していた。さらに、それが心理的な意味領域の動詞にかかった場合は、「なんとか」「一生懸命に」努力する様子が、一層、抽象的で捉えにくいものとなっていた。

このように、動詞「強いる」と副詞「強いて」の間には、共通していて類似する点があると言える。この類似点を以下の《 》で示す。

強いる：強要する人には《なんとかして》《一生懸命に》《熱心に》という様子があり、強要される人には《無理やり》という様子が伴う。

強いて：具体的行為をする時の《懸命に》《なんとか》努力して、《熱心に》する様子や、嫌な気持ちを抑えて《無理に》する様子、さらに抽象的な行為をする時の《なんとか》《一生懸命に》努力する様子を表す。

上記のように、起点領域の動詞と目標領域の副詞の間は、「類似性 (= 隠喩)」で結ばれることになる。そして、この関係は「強要する行為」と「(強要する行為をする人の)様子」という現実世界の「近接性 (= 換喩)」の關係に遡ることができる。つまり、「強いる」から「強いて」への文法化は、行為を強要する人の気持ちに心的アクセスをして、その人に生じている様子を連想することによって起こったと考えられる。その際、「強

いて」という言語形式は動詞連用形として従来からあるが、その言語形式が新たな概念を表すために用いられたと考えられる（高橋1998：56）。具体的な行為から、その行為に伴う様子（＝副詞的意味）を主体的に切り取り、すでに存在する言語形式の上に乗せてその意味を運ぶ時、文法化が起こると考えられる。

4. 「追う」から「追って」へ

動詞「追う」と副詞「追って」の意味は、『日国』によれば、次のようである。ただし、動詞の意味は数が多いので、主要なものだけを記した。

- 追う：① 先に進むものに到達しようとして、あとから急いで行く。追いかける。【8世紀後～】
- ② 場所、物事など、ある目標をめざして進んで行く。追い求める。【935年頃～】
- ③ （物事の順序、時の流れ、既成の道、先人の跡などに）そのまま従って行く。【1130年頃～】

追って： あまり間をおかないで。いずれすぐに。近いうちに。【1086年～】

動詞の三つの意味のうち、①が具体的で物理的な意味を持ち、②と③の意味は①から派生したと考えられる。副詞の方は、上記の意味が一番古く、また、文法化に関連する意味である。これらを歴史的に出て来た順に並べると、動詞①の意味（8世紀後）、動詞②の意味（935年頃）、副詞の意味（1086年）、そして動詞③の意味（1130年頃）となる。

動詞②の意味（ある目標をめざして進んで行く）は、動詞①の意味よりも、より抽象的である。文法化の起点は、具体性が高く、物理的な意味領域のものであると考えられるので、動詞①の具体的な行為を表す「あとから急いで行く、追いかける」が起点領域の意味である。また、目標領域の副詞の意味は、「あまり間をおかないで、いずれすぐに」などの時間的概念を表すものとなる。

では、動詞「追う」の用例のうち、起点領域の意味として、具体性が高く、想起されやすいものを、以下に見ていくことにする。

- (1) 宗吉は、跣足で、めそめそ泣きながら後を追った。（売色鴨南蛮）
- (2) 歌を半ばにして、細君の被けた蒲団を着たまま、すくと立上って、座敷の方へ小山の如く動いて行った。何処へ？ 何処へいらっしゃるんです？ と細君は気が気

でなくその後を追って行ったが、(蒲団)

- (3) 三右衛門は思慮の違もなく跡を追った。中の口まで出たが、もう相手の行方が知れない。痛手を負った老人の足は、壮年の癖者に及ばなかったのである。
(護持院原の敵討)
- (4) ふと雪江さんの座蒲団が眼に入る……これを見ると、何だか捜していた物が着附ったような気がして、卒然引抜いて、急いで起立って雪江さんの跡を追った。
(平凡)
- (5) 彼はすぐ二人の後を追って其所の二階へ上ろうとしたが、電燈の強く往来へ射す門口まで来た時、不図気が付いた。(彼岸過迄)
- (6) 「もう大丈夫でしょう。頓服を一回上げますから今夜飲んで御覧なさい。多分寝られるだろうと思います」と云って医者とは帰った。小六はすぐその後を追って出て行った。(門)
- (7) 美禰子は又向うをむいた。見物に押されて、さっさと出口の方へ行く。三四郎は群集を押し分けながら、三人を棄てて、美禰子の後を追って行った。(三四郎)

行為動詞の「追う」には、上記の用例から分かるように、必ず二人の関与者が含まれている。そして、「AはBの後を追った」という具体的状況を表し、「Aは(先に行く)Bの後を追いかける」というのが基本的な意味である。

それぞれの用例の中で、「追う」立場の人間の気持ちに心的アクセスし、その状況などを考えてみると、「追う」側からすれば、自分の方は残されて「後になって」しまった、という気持ちや様子が強く出ていることが分かる。同時に、「すぐに」追いつきたいという気持ちも表れている。つまり、「追う」という具体的行為をする人は、自分は「後」になってしまった、という時間的概念を強く持っているのである。

次に、副詞「追って」の用例を見ていくことにする。

- (8) これも医学の落第生。追って大実業家たらむとする準備中なのが、笑いながら言ったのである。(売色鴨南蛮)
- (9) 追ってはどうか知れないでしょうけれども、差当り困るような事はないんですって(道草)
- (10) 追って処分するまでは、今まで通り学校へ出る。(坊っちゃん)
- (11) 追っては君にもっと働らいて頂だかなくってはならん様になるかも知れないから、(坊っちゃん)
- (12) 詳しい事は追って東京で聞くとして、唯一言だけ要領を聞いて置こうか(行人)
- (13) 海水浴は追って実行する事にして、運動だけは取り敢えずやる事に取り極めた。

(吾輩は猫である)

- (14) 道楽は追って金が這入り次第やる事にして、今夜はこれでやめよう

(吾輩は猫である)

- (15) 追って祝儀はする、此処でと思うが、その娘が気が詰ろうから、何処か小座敷へ休まして皆で饅頭でも食べてくれ。(歌行燈)

(8)~(15)の「追って」は、物事を「あとで」「のちほど」行うという時間的な概念を表している。また、時間の幅によって「すぐに」(13)(15)という短時間を表す時があれば、「いずれ、あまり間をおかないで」(10)(12)(14)とか、「何か月・何年かのちには」(8)(9)(11)というように、中長期的な時間の概念を表す時もある。

動詞の「追う」と副詞の「追って」の間には、どちらも時間的な概念が付随するという共通点がある。これは、以下の様にまとめられる。

追う：追いかける人は、自分の方は残されて《後に》なってしまった、という気持ちが強い。また、《すぐに》追いつきたいという気持ちも表れている。

追って：物事を《あとに》行うという時間的な概念を表している。時間の幅に広がりが出てきて、《すぐに》という時間的な間隔が短いものだけでなく、《いずれ》《あまり間をおかないで》や《何か月・何年かのちには》というような中長期的な時間の概念も表す。

「追う」と「追って」は、どちらにも《あとに》《すぐに》といった時間的な特徴があることが類似点である。「追って」はさらに《いずれ》《あまり間をおかないで》や《何か月・何年かのちには》という意味も表しているが、これは、文法化した後の副詞の「追って」が時間的な幅をもたせるようになったものと考えられる。このように、「追う」と「追って」の二つの間に類似性が見出されるわけだが、これは、現実世界における「人を追いかける行為」と先に行った人に対する「時間的な後れ」という近接性の関係に遡ることができる。追う側は先の人よりも常に「あとになる」という状況があるため、その時間的な概念が「時間」に関する副詞「追って」の意味に取り込まれたのである。「追う」に近接する、時間的に「あとになる」という特徴が「あとで」「すぐに」などの意味を表す「追って」となったのである。これは、具体的な領域のもの（行為動作）によって抽象的な領域のもの（時間）を概念化するという文法化の方向性を示している。

5. 「重ねる」から「重ねて」へ

動詞「重ねる」と副詞「重ねて」の意味は、『日国』によれば次のようである。

- 重ねる：① ある物の上に，他の物を添え加える。【720年～】
 ② ある事の上に，さらに他の事を添え加える。また，同じ物事を繰り返す。歳月の繰り返しもいう。【8世紀後～】
 ③ 酒を何杯も繰り返し飲む。【1841-1842年頃～】
 ④ 二つ以上の物事を，同じ時に行なうようにする。

- 重ねて：① 同じ行為，事実が二度繰り返されるさまを表わす。もう一度。再び。さらに。【1001-1014年～】
 ② 現在の出来事が再び生じ得るとみなした限りでの未来を表わす。この次。将来。今後。そのうち。【室町末-近世初～】

動詞については①と②の意味が古くからあり，③と④の意味は後世になって出ている。副詞については，①が中心的な意味であり，②は①からの派生であると思われる。歴史的な順番は，動詞の①（720年）と②（8世紀後）の意味が出た後，副詞の①（1001-1014年）の意味が出ている。

文法化の起点となるのは，動詞の①か②の意味である。動詞①の意味の用例として『日国』は，「然も国の危殆（あやう）きこと，卵（かひこ）を累（カサ）ぬるに過ぎたり」を挙げているが，この意味は自然に動詞②の意味「同じ物事を繰り返す」を伴っていると考えられる。動詞の①と②の意味が出現した年代が近いことや，①は②の意味を内包することを考え，これら二つを合わせた次の意味，「ある物・事の上にさらに他の物・事を添え加える。また，同じ物事を繰り返す」を，起点領域の意味とすることにする。

目標領域は，副詞の①の意味，「同じ行為，事実が二度繰り返されるさまを表わす，もう一度，再び，さらに」である。これらの起点領域と目標領域の意味を持つ動詞や副詞の用例を以下に見ていくことにする。

まず，「重ねる」の用例は次のようである。

- (1) 万事を明日に譲る覚悟を極めた彼は，幾度かそれを招き寄せようとして失敗った揚句，右を向いたり，左を下にしたり，ただ寐返りの数を重ねるだけであった。
 (明暗)
- (2) かくまでも端正に，かくまでも静肅に，かくまでも度を重ねて繰り返す人の姿の，入口にあらわれては消え，消えてはあらわるる時の余の感じは一種異様である。

(草枕)

- (3) 絶えず監視の下に置かれた様なこの状態は、一時性のものでなくって、幾何面会の度数を重ねても、決して薄らぐ折はなかりとまで彼には見えた位である。

(彼岸過迄)

(1)~(3)の中で、「重ねる」は「寝返り」や「人の姿の現れる」回数、また「面会」の度数に関して、それが繰り返されることを言っている。

- (4) 猶三四回書面で往復を重ねてみたが、結果はいつも同じ事で、版行で押した様に何れ御面会の節を繰り返して来るだけであった。(門)
- (5) 五条子爵は秀麿の手紙を読んでから、自己を反省したり、世間を見渡したりして、ざっとこれだけの事を考えた。しかしそれに就いて倅と往復を重ねた所で、自分の満足するだけの解決が出来そうにもなく、(かのやうに)
- (6) 問答を重ねているうちに、お時の病院へ行った意味が漸くお延に呑み込めるようになって来た。(明暗)
- (7) こういう問答を重ねれば重ねる程、兄さんの調子は益変になって来ます。(行人)

(4)~(7)において「重ねる」は、書面や手紙を往復させる事(4)(5)や、問答を繰り返す事(6)(7)を表す時に使われている。

- (8) けれども浅間しい人間である以上、これから先何年交際を重ねても、この卑怯を抜く事は到底出来ないんだという自覚があった。(行人)
- (9) 私が奥さんを疑ぐり始めたのは、極些細な事からでした。然しその些細な事を重ねて行くうちに、疑惑は段々と根を張って来ます。(こころ)

「重ねる」はまた、「交際」(8)や「些細な事」(9)という「事柄」についても、それが繰り返されることや重なることを表す。

- (10) 我慢に我慢を重ねて、此処まで来た様なものの、(坑夫)
- (11) 如何に悔恨の苦しみを重ねても、どうする事も出来ない (門)
- (12) 私自身が何層倍歯痒い思いを重ねて来たか知れない位です。(こころ)

「重ねる」はさらに、「我慢」(10)、「悔恨の痛み」(11)、「歯痒い思い」(12)のような、より抽象的な心理領域についても、その心理状態が繰り返されるという意味を表すために使われている。

以上、動詞の「重ねる」についてまとめると、次のようになる。「重ねる」は、「寝返り」「人の現れる回数」など具体的行為の繰り返し、また、「書面の往復」の繰り返し、「問答」など言語的行為の繰り返しを表すためにも用いられる。さらに、「交際」「些細な事」などの「事柄」が繰り返される時や、「我慢」「悔恨の苦しみ」「歯痒い思い」といった、より抽象的な心理的状态が繰り返されることを表すためにも用いられる。

次に、副詞「重ねて」の用例を見ていくことにする。

- (13) こっちもぼんやりしていたが、岡田も矢っ張ぼんやりしていたようだ。何か考え込んでいたのではあるまいか。こう思うと同時に、岡田がどんな顔をしているか見たような気がした。そこで重ねて声を掛けて見た。(雁)
- (14) 「あの今晚は檀那様がいらっしゃらないだろうと思うから、お前内へ往って泊って来たけりゃあ泊って来てても好いよ」お玉は重ねてこう云った。(雁)
- (15) 僕は一体どんな事が書いてあるのかと聞いた。彼はまあ読んで見ると云って、その本を取って僕に渡した。標題にはゲダンケという独乙字が書いてあった。彼は露西亜物の翻訳だと教えて呉れた。僕は薄い書物を手にしながら、重ねてその梗概を彼に尋ねた。彼は梗概などはどうでも好いと答えた。(彼岸過迄)
- (16) 「今日は何処かへ廻る日なのかね」と重ねて尋ねた時、お重は「どうだか知らないわ。書齋へ行って壁に貼り付けてある時間表を見て来て上げましょうか」と云った。(行人)
- (17) 私はまだ寝ないのかと襖ごしに聞きました。もう寝るという簡単な挨拶がありました。何をしているのだと私は重ねて聞きました。(ころろ)
- (18) 津田は叔母の手前重ねて悪口を云う勇氣もなかった。(明暗)
- (19) 「どうして、そんな所へ這入ったのだ。当分其所にいる積なのかい」と宗助は重ねて聞いた。安井はただ少し都合があつてとばかり答えたが、(門)
- (20) ある日一つ車の腰掛に膝を並べて乗った時、それは何だと聞いて見た。同僚は小形の黄色い表紙を宗助の前に出して、こんな妙な本だと答えた。宗助は重ねてどんな事が書いてあるかと尋ねた。(門)
- (21) 「まだ御起きにならないのですか」と声をかけたまま、しばらく立って、首の出ない夜具を見つめていた。今度も返事がない。細君は入口から二歩ばかり進んで、箒をとんと突きながら「まだなんですか、あなた」と重ねて返事を承わる。(吾輩は猫である)
- (22) 「悪いと思いながら今日まで歩を進めて来たんだね」と平岡は重ねて聞いた。語気は前よりも稍切迫していた。(それから)
- (23) 「私が変わるう御座ンした……」と差俯向いたままで重ねて謝罪た。(浮雲)

「重ねて」は上記のように、「重ねて声を掛けて見た」「重ねてこう云った」「重ねてその梗概を彼に尋ねた」「重ねて尋ねた」「重ねて問いました」「重ねて悪口を云う」「重ねて聞いた」「重ねてどんな事が書いてあるかと尋ねた」「重ねて返事を承わる」「重ねて聞いた」「重ねて謝罪た」と、言語的行為に関してその行為を繰り返す時に使われている。

動詞の「重ねる」は、具体的行為や言語的行為の繰り返し、また、具体的・抽象的な事柄の繰り返しを表している。これらは、基本的には「ある行為をしたあとで、また同じ行為をする」という意味である。そこには、反復的な行為を表す「再度」「反復」「繰り返し」といった特徴がある。つまり「行為」とその行為の「反復」という近接性の関係から、「繰り返し」という頻度の概念を表す副詞「重ねて」が出てきたと考えられる。

6. まとめ

以上の「強いる」から「強いて」へ、「追う」から「追って」へ、「重ねる」から「重ねて」へという文法化の分析をまとめると次のようになる。

「強いる」と「強いて」の間には《なんとか》《懸命に》《熱心に》や《無理に》という特徴の類似関係がある。この関係は、具体的な「強要する行為」から、強要する人、または、強要される人の「様子」を連想した時、そこに存在する両者の近接関係（＝換喩）に還元することができる。強要する行為に伴う様子を概念化（＝ここでは「言葉を与える」程の意味）した時、同時に文法化が引き起こされたと考えられる。

「追う」と「追って」の間には《すぐに》《後に》という類似関係（＝隠喩）があり、この関係は、具体的な「追いかける行為」と、追いかける人の「あとになってしまった」という気持ちの近接関係（＝換喩）に遡ることができる。現実世界の具体的な行為に伴って生じる「時間的概念」を主体的に読みとり、時間（近未来）を表す副詞の「追って」へと文法化したのである。

「重ねる」と「重ねて」の間には、どちらも「行為の繰り返し」という類似点があり、具体的な「反復する行為」から、反復する人のその繰り返す頻度を概念化し、副詞の「重ねて」へと文法化したと考えられる。

「強いる」「追う」「重ねる」という行為を表す動詞の意味は、現実世界の身体的・具体的な意味領域に属している一方で、「強いて（懸命な様子・努力の度合い）」「追って（後になるという時間的概念）」「重ねて（繰り返す様子や頻度）」は「様子」や「時間的概念」や「頻度」という、より抽象的で捉えにくい意味領域に属するものである。「行為」と、「様子」「時間概念」「頻度」は、互いに異なる意味領域に属しているにも関わらず、両者は比喩の働きによって結び付けられたのである。そこには、行為を表す動詞をその行為に近接する、別の抽象的で捉えにくい意味領域のものを概念化するために用い

るという比喩の特質が見られるのである。人間が使う語彙数は限られているが、その限られた語彙の中で無限の状況を柔軟に概念化しようとする創造的工夫が比喩の働きの中に表れている。こうした意味領域間の飛躍を可能にする比喩の働きは、現実世界の経験に根ざした換喩的理解によって支えられている。これら動詞から副詞への文法化は恣意的なものではなく、「経験によって強く動機づけられている (Lakoff 1987)」のである。そして、比喩の働きは品詞の枠に捕らわれることはない。品詞という大きく異なる意味領域の間にさえ類似性が見出されることは、辞典の意味記述でも容易に気づくことができるのではないだろうか。それは、私たちが文法化の痕跡を見ているということである。比喩は、動詞から副詞へ、名詞から動詞へ…と品詞の枠を飛び越えて、文法化や言葉の意味拡張の原動力となる人間の創造的な認知能力なのである。

*本稿は、「語彙・辞書研究会 第15回研究発表会」における口頭発表が基になっており、高橋 (1999) を、修正し、加筆したものである。

参考文献

- Halliday, M. A. K. (1985) *An Introduction to Functional Grammar*. Edward Arnold.
- Heine, Claudi, & Hünnemeyer (1991) *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. University of Chicago Press.
- Johnson, Mark (1987) *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. University of Chicago Press. (菅野盾樹・中村雅之訳 (1991) 『心の中の身体』 紀伊国屋書店)
- Kövecses & Radden (1998) "Metonymy: Developing a Cognitive Linguistic View." *Cognitive Linguistics* 9 : 37-77.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作他訳 (1993) 『認知意味論』 紀伊国屋書店)
- Lakoff & Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press. (渡辺昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳 (1986) 『レトリックと人生』 大修館書店)
- Paprotté & Dirven (Eds.) (1985) *The Ubiquity of Metaphor*. John Benjamins.
- Rudzka-Ostyn, Brygida (1985) "Metaphoric Processes in Word Formation: The Case of Prefixed Verbs." In Paprotté & Dirven (Eds.) (1985) 209-241.
- Rudzka-Ostyn, Brygida (Ed.) (1988) *Topics in Cognitive Linguistics*. John Benjamins.
- Taylor, John (1989) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford University Press. (辻幸夫訳 (1996) 『認知言語学のための14章』 紀伊国屋書店)
- 池上嘉彦 (2002) 『自然と文化の記号論』 放送大学教育振興会
- 佐藤信夫 (1978) 『レトリック感覚』 講談社

- 瀬戸賢一（他編）（2007）『英語多義ネットワーク辞典』小学館
- 高橋光子（1998）「副詞「決して」の成立」『国語と国文学』75巻10号 pp.42-58
- （1999）「比喩による抽象的な意味分野の概念化について——「強いて」「追って」「重ねて」を例に——」『語彙・辞書研究会 第15回研究発表会（発表資料）』（6月26日 三省堂文化会館）pp.11-20
- 辻幸夫（2002）『認知言語学キーワード事典』研究社
- 松本曜（編）（2003）『認知意味論』大修館書店
- 山梨正明（1995）『認知文法論』ひつじ書房
- 『日本国語大辞典 第二版』（2001）小学館
- 『CD-ROM版 新潮文庫 明治の文豪』（1997）新潮社